



暮らしとエネルギー

エネルギーに対する関心が高まる中、その正しい知識や情報を得る機会は限られています。本講座では、エネルギーについて生活者の視点で分かりやすく解説していきます。全体監修に大阪大学の下田吉之教授を招き、第1講では眉山女学園大学の東珠実教授に消費者教育の観点から講座の意義を語っていただきました。

エネルギー講座を開講するに当たって

大阪大学大学院教授 下田吉之

以前からの地球温暖化問題に加え、昨年春の福島第一原子力発電所の事故、それに続く関東での大規模な計画停電、全国的に広まる節電要請など、今や「エネルギー」は市民の大きな関心事となっている。

これまで長い間、私たちは資源や環境の制約をあまり感ずることなく、エネルギーを支えられた生活を送ってきた。我が国で家庭部門が消費するエネルギー量は過去50年間で数倍に増加している。古くは1960年代の「三種の神器」というキャッチフレーズで知られる家庭電化製品の普及から、最近の携帯電話やパソコンなど情報革命まで、私たちの生活の変化は、同時にエネルギー消費の急増をもたらした。今や広域化・大規模化したエネルギーシステムの支え無しには私たちの生活はままならない。何万年と続く人類の歴史のわずか数世代前には、自分の住まいの周辺から得られる燃料でほとんどのエネルギーが賄われていたことが信じられないほどである。

しかし、私たちのエネルギー消費量が数倍になったにもかかわらず生活の質が「数倍」になったという感覚はない。また、エネルギーは物や水など他の資源のように見ることができないことから、自分の暮らしを支えるためにどの程度のエネルギー資源が消費されているのか、機器毎のエネル

ギー消費の大きさとそれがもたらすサービスを比較して、どこに無駄があるのかを感覚的に把握することは難しい。さらには各家庭に届けられるエネルギーが、世界各地からどのように運ばれ、いかに変換されているかを認識することはほとんど困難である。しかしながら、現在我が国が直面するエネルギー問題においては、市民一人ひとりが正しい情報のもとに、合理的な判断と選択を行うことが何よりも必要となっている。そのため、エネルギーリテラシー（エネルギーを賢く使うための基礎知識）を身につけることが重要である。本講座はこのような問題意識のもと計画されたが、何よりあまり前例の無い試みであり、その目的を達成するには読者からのフィードバックを得ながら方向を修正していくことが大事だと考えている。どうか忌憚ないご意見をお寄せいただきたい。

CEL

● ● ● ● ●
下田吉之（しもだ・よしゆき）

大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻教授。1985年大阪大学工学部卒業。90年大阪大学大学院工学研究科環境工学専攻修了。専門分野は、都市民生用エネルギーシステムに関する研究、都市気象、エネルギーシステムの環境影響評価。主な著書は『都市のり・デザイン』（共著・学芸出版社）など。